スタディツアー報告フィリピン

スタディツアー in フィリピン　活動報告

佐々木ゼミ学部４年
秋葉　聡太　米山あずさ　境谷　美穂
長岡　玲香　花摘　稜太　北條　彩加　吉田　博美

はじめに

私たち佐々木ゼミは 2013 年３月 19 日～３月 27 日の９日間、スタディツアーとしてフィリピンのダバオを訪れた。気温 32 度の青空の下、道路にはたくさんの車やバイク、ジプニーが犇めき合い、市場には色とりどりの野菜や果物が並んでいた。東南アジアの文化・生活様式・情緒の強烈な「洗礼」を受けながら、フィリピンにおける私たちの学びの日々が始まった。

滞在中のスケジュールは以下の通りである。

月日	滞在	交通機関	時刻	摘　　要
3/19	成田 マニラ ダバオ	PR431 便 PR817 便 専用車	9：30 15：00 16：50	成田空港よりマニラ経由（13：05 着）ダバオへ。 ダバオでの宿泊先カーサマリアへ。
20	ダバオ	専用車	AM PM	ミンダナオ国際大学の見学。 Our Lady Of Victory トレーニングセンターの見学。
21	ダバオ	専用車	AM PM	日本・フィリピン歴史資料館 トゥボック老人ホームの見学。
22	ダバオ HOJ	専用車	AM PM	コスギアン老人ホームへ炊き出し。 ハウス・オブ・ジョイへ。子どもたちと交流。
23	HOJ	トラックの 荷台	AM PM	子どもたちとウラワビーチへ。 夕飯の準備（スタッフと共にカレー作り）
24	HOJ ダバオ	専用車	AM PM	船で沖へ出てシュノーケリングとサンゴ観賞。 ハウス・オブ・ジョイからカーサマリアへ。
25	ダバオ	専用車	AM PM	八木幼稚園の卒園式に参列。食事会に参加。 市内見学
26	ダバオ	専用車	AM PM	ミンダナオ国際大学の学生と植林活動。 帰国準備
27	ダバオ マニラ 成田	PR812 便 PR432 便	9：25 14：55 20：10	ダバオからマニラ（11：05 着）へ マニラから成田へ

トゥボック老人ホーム

トゥボック老人ホームはダバオ市郊外にあるNGO運営の高齢者施設で、2004年に開設された。費用は月額15,000ペソ（約３万円）で、部屋代、食事代、ランドリー代、光熱費、介護費、レクリエーション費などが含まれている。ダバオの多数の大学から研修生が来ている。

メイン棟の外にある個室の部屋は、広さ３～４畳で、竹で作られていた。男性入所者の方で、外に出ようとしているのにドアが開かないようになっている部屋もあり、拘束に該当する状況も見た。メイン棟はハエが多く、テーブルだけではなく入所者の体にもたくさんとまっていた。布団にもハエが集っており、衛生面に不安を感じた。また、片足が壊疽している方もいた。メイン棟の奥はトイレになっており、排泄物の臭いが個室まで充満していた。この臭いの中で食事をするのはどうなのだろうと思った。入所者は慣れているのだろうか、それとも我慢しているのだろうか。スタッフによると、臭いの原因は入所者が場所を問わず排泄をしてしまうことだという。おむつは使わないのかという疑問が浮かぶが、経済的・経営的におむつの使用は困難だという。

コスギアン老人ホーム

コスギアンは、ダバオ市が運営する老人ホームであり、海外を目指す現地の介護士が介護技術を磨くためにボランティアとして活動する制度を設けている。

朝は現地スタッフと共に、炊き出しで使う材料の調達に市場へ行き、その後ミンダナオ国際大学の隣のドミトリーの厨房で、学生、先生、スタッフで調理をした。

コスギアンは日本の施設と違い開放的な造りだった。しかし、衛生的な部分では少し改善すべきなのではないかという印象を受けた。

ハウス・オブ・ジョイ（House Of Joy：HOJ）

ハウス・オブ・ジョイはフィリピンのミンダナオ島にある、日本人が運営している孤児院である。フィリピン政府福祉局の連絡を受け、親の死や行方不明、また虐待などに苦しむこども等を 18 歳まで保護し、協同生活をしている。

ハウス・オブ・ジョイ周辺の村の住民は、月数千円という月収で生活しており、一世帯の人数も多い。貧しさは子供たちに早い自立を余儀なくする。そんな子供たちにとって、学校に通えること、一日三回の食事ができることは、子どもにとって新鮮な喜びになるという。　同じ苦しみ・悲しみを理解し合っている子どもたちが、お互いに支え合いながら未来へと歩んでいく場所、それがハウス・オブ・ジョイだといえる。

私たちは、３月２２日から２４日までの３日間、ダバオを離れダバオオリエンタルにある HOJ（ハウス・オブ・ジョイ）を訪れた。到着後、早速夕食までの間子どもたちと日本から持ってきた遊具などを使い遊んだ。子どもたちはみんな優しく、笑顔がとても輝いていた。食後は、HOJ のみんなが歓迎会を開いてくれた。

２日目は、朝から市場に行き、私たちから HOJ のみんなにカレーをご馳走する為の買い出しを行った。その後は、HOJ のみんなと近場の海に向かった。天気がよく、海も透き通っていて、子どもたちと同じくらい私たちもはしゃぎながら一緒に遊んだ。

そして最後の夕食。次の日にはダバオ市内に戻る為、その夜が一緒に過ごせる最後の時間だった。子どもたちは、たくさんのカレーをおかわりで全部綺麗に食べてくれた。

おわりに

今回のスタディツアーは私たちに様々なことを教えてくれた。様々な学びの中で、滞在中特に注目したのは日本との相違である。

老人ホームでは、衛生管理やケアの方法・理念、入所の背景、運営構造など、日本とは異なる点が多く見受けられた。改めて「利用者本位」「個別支援」「エビデンスに基づくケア」の重要性を実感すると同時に、どこか日本の施設が厳密な制度や理想的な理念に縛られているようにも感じた。

また、寄付金（Donation）を受けている施設と受けていない施設との設備の相違も大きく、開発途上国における福祉サービスの現状を感じ取ることができた。

孤児院でも多くの相違点を発見した。一日三回の食事ができること、教育を受けられることの重要性は、日本では学ぶことができても実感することはできないだろう。貧しさに加え、親の死や行方不明、虐待等を経験してきた子供たちの笑顔からは、「初心」とはかけ離れた「逞しさ」が感じられた。

今回のスタディツアーで学んだことを社会福祉実践に直接繋げることは困難かもしれない。しかし、人に寄り添うことに福祉の価値があることを実感できた今回のスタディツアーは、私たち社会福祉を学ぶ学生にとって貴重な体験であり、大きな価値があったといえる。